

第四号：第四十四首～第六十八首

天理教という集団のなかで多くの時間を過ごし、天理教用語に慣れ親しむようになると、当然天理教に関して新しい言葉に出会う頻度は少なくなってくる。とりわけ子供の頃から天理教のなかで生まれ育つ者にとっては、言葉の「目新しさ、は自発的に求めなければ得られないだろう。ところが、耳慣れた言葉でもそこに込められた神意を汲み取ることは決して容易ではない。「おふでさき」は「悟る」という言葉で、人間が神意を察して理解するように再三求めている。

「どんなことでも、現れてきた事柄には神の深い想いがあるのだが、そばの者たちにはそれが分からない。

今日までは歩むべき道が何も見えてはいないが、もう直ぐにでも見えてくるから、よく考えて心を定めよ。神の方ではこの道を早く知らせようと思っただけだが、人間が神の意中を悟れないのでなかなかその実現が難しい。だんだんとこのように筆に記してはいるけれど、言葉の真意を悟ってくれないのが、神には大変残念である」(四号 44～47)。

それではその神意とは何か。それは、人間の真心を込めた「陽気づとめ」の実行である。

「どんな事でも神の言う事をしっかりと聞くようにせよ。すべて各々の心次第である。心の底から勇み立ち、神の真意をよく考え、神を信頼してもたれて、そして『陽気づとめ』を実行せよ。

これを何の話かとは思ふなよ。これは『肥のつとめ』や『肥のさづけ』で百姓を救ってやりたいという話なのである。肥といっても、神前に供えた糠や灰や土が効くというようなことではない。人間の神にもたれる真心が効いて、実りの守護を頂戴できるのである。そして、これは肥料のことばかりでなくて、神がお前たちの真心さえ見定めたなら、どのような守護もすると思え」(四号 48～52)。

『注釈』によれば「肥のつとめ」とは、糠3斗、灰3斗、土3斗を合わせてこれを百駄の肥料として甘露台に供えて祈願するつとめであり、「肥のさづけ」とは、糠3合、灰3合、土3合を神前に供えて一駄分に相当する効験を頂く特別の許しである。米の単位として1斗=10升=100合で、1駄はおよそ2俵(=8斗=800合)なので、「肥のつとめ」の場合、糠、灰、土を合わせて900合で80,000合分(およそ90倍)の肥料と同等の効験を得ることができ、「肥のさづけ」でも、糠、灰、土を合わせて9合となり、800合分の効験を得られる。

肥料取締法によれば、「肥料」とは「植物の栄養に供すること又は植物の栽培に資するため土壌に化学的变化をもたらすことを目的として土地にほどこされる物及び植物の栄養に供することを目的として植物にほどこされる物」と定義づけられており、その目的は端的には植物の栽培である。しかし、「肥のつとめ」「肥のさづけ」は単に植物の栽培のみにとどまらず、第51首で『肥のつとめ』や『肥のさづけ』といっても何が効くのであろうかとは思ふな。人間の神にもたれる真心に応じて効能が得られるのである」と歌われているように、物心両面における救済が念頭に置かれている。幕末期は凶作や飢饉に加えて大地震にも見舞われて、下層農民の生活が一層困窮したことが

伝えられているが、そのような厳しい状況下で、人間の真心次第におよそ90倍の肥料と同等の効験を与えようとされているのである。さらに、

「しっかり聞け。万事に渡って教えるが、それについては誰彼の差別は決してない。どんなところの者がやって来てもすべて親神によって創められたという元々の因縁によって繋がるものであるからそこには何の隔てはない」(四号 53～54)。

と述べて、百姓だけではなくすべての人々が互いに神と関係していることを歌っている。注意すべきは、ここでいう因縁とは、人間が互いに相関し合うという相対性を示しているのではなく、すべての人が親神による人間の創始という一点に結ばれるという集結性を示していることである。そして、この集結性を踏まえて次のように歌われる。

「この屋敷は人間を創め出した親の里である。故郷であるがゆえに元々人間を創めた神が天降ったのだ。これから先は世界中を分け隔てなく救げるための守護をすべて教える。

そして万事を救げる道を順々と教えて、それから神の教えを「知る」、「知らない」の区別をはっきりさせる。神が第一に急いでいるのは、この区別をはっきりさせる道であり、この区別さえ明らかになったなら、それから後はすべて神の意のままとなる」(四号 55～59)。

この「神の教えを「知る」、「知らない」の区別をはっきりさせる」と意識した箇所は、原文では「から」と「にほん」という言葉を使っているが、その意味するところは要するにこの教えとそうでないものを判然とさせることと言える。つまり、世界の人々の存在価値になぜ分け隔てがないのかを明らかにしたあと、その世界を分け隔てなく(一れつに)救げるための道程として、まず教えを判明させる必要を説かれているのだ。教えが弘まるための区別であって、決して存在価値における差別ではない。そして、教えを「知る」、「知らない」を判然とさせようとして、「知らない」者を「知る」者へと育てていくという順序を辿っていく。

次の一連の歌がこれまでのことを集約的に述べているといえよう。

「今日という日は、何か珍しい、今までにないような素晴らしい道を始め出す。そして、神が元々人間を創めたという因縁によって、皆、この道について来る。因縁といっても多くの人であるから分け隔てがあるのじゃないかと思うかもしれないが、決してどこにも分け隔てはない。というのも、この世界を創めた神にとっては、世界中の人間は皆我が子だからだ。すべての子が変わらず可愛いがゆえに、色々と心を尽し切っているのだ。この子供たちに何もかも教えて、早く早くと念ずる神のはやる気持ちを分かってくれ。

子供が順々に神意が分かり、その想いに沿った生き方をするのを待ちかねている。神が考えていることはこればかりである。

そして、そのような子供をさき早く表へ出したなら、神の真意が知られていないところにも、その思いを行き渡らせる。だから、本当に子供の心をしっかりしてほしい。神の心は急ぐばかりである。日々、神の切ないほどに急ぐ気持ちを汲みとって、世界を救げる準備を急いでもらいたい」(四号 60～68)。